

見返りを期待しない利他行動における共感の意義

—奉仕活動の動機から考える—

川上 祐美

(早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程)

(同大学 人間科学部非常勤講師)

(和文要旨)

生物の利他行動は、適応のための戦略の一つとして理解されているが、人間には、行為の見返りを期待せず、ときには自己の生活や生殖の機会をなげうってまでも他者に献身する行為が見られる。たとえば修道者による奉仕活動などがその特徴的な例としてあげられるが、必ずしも宗教的背景を持たずともそのような行為を行う者もある。しかし、なぜ人間が「見返りを期待しない利他行動」を行うのかについては、まだ明確な説明がなされていない。そこで本論では、利他行動に関する様々な事例について進化生物的視点から考察し、奉仕的行動は人間特有の強い共感の性質によって起こるのではないかとの仮説をたてた。そして、奉仕活動に関わる人々へのインタビューを試みたところ、利他行動は宗教的教理が意識される以前に他者への強い共感に基づいて喚起される場合が多く認められた。そのような性質が人間だけに進化した理由として、生きる知恵を文化として子孫に伝える過程において、強い共感が有効に働いたという新たな見解を示した。さらに、たとえ共感の性質が遺伝的欠陥や発達障害によって正常に発現しない場合においても、整合性のある規範や宗教的倫理を習得することによって、より一般的に、人間の行動を律する可能性が考えられることを示した。

(SUMMARY)

Although altruistic behaviors are observed in animals, they can always be explained as a kind of adaptive strategy for survival of the species. In human, altruis-

tic behaviors without expecting any return are seen. Charity works by priests are often altruistic, but people having no particular religious background also perform similar behaviors. However, the reason why only humans can be altruistic is not yet well explained. I investigated some well known cases of altruistic behaviors from the view point of social biology, and proposed a hypothesis that altruistic behaviors were often motivated by strong compassion. Then I did interview to people involved in charitable works, and verified the hypothesis. It was also pointed out that the reason why strong compassion was evolved only in humans can be explained so that to feel the mental experiences of others similar as those of his or her own would make cultural transmission effective, because experiences of ancestors would cause vivid impressions by compassion and so securely remain in one's own memory. Consequently, it can be said that altruistic behaviors without expecting any return can occur as peculiar to human because of the nature of strong compassion. Moreover I examined that generally, the appropriate ethical values or religious prescription could urge people to perform altruistic behavior even when the genetic defect or developmental disorder hinders compassion from working well.

1. 人間の利他行動の再考

「全財産を貧しい人のために使い尽くそうとも、誇ろうとして我が身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない」(コリント I・13:3)と新約聖書に記されているように、キリスト教においては、愛や共感の伴わない利他行為はむなしい、という理解がある。しかし、周りを見回してみると、国際援助から福祉事業、隣人へのプレゼントに至るまで、行為の裏には人々の様々な思惑が渦巻いている。また様々な社会において、見返りを期待しない贈り物はない、という文化人類学者の指摘さえある¹。他者の存在は、現代のシステム社会の中では、相互に協力関係であると同時に競合相手でもあり、この事実は人間に限らず、生物に一般的にみられる生存のための自然界の巧妙なシステムなのである。

¹ M・モース著、有地亨訳『贈与論』、勁草書房、1962、pp. 226-262。

ところが、人間にはしばしば、修道士や出家者などのように、己の人生をなげうって他者に奉仕する者がいる。このような行動を生物進化の過程で考えると、自己の保存と生殖の機会を放棄するような性質をもつ個体は、遺伝的に継承されず、淘汰されてしまうはずであるが、人間社会において、自己犠牲を伴うような見返りを期待しない奉仕行為をする者はなくなり、むしろ人々の間で賞賛されることもある。本論では、そういった利他行動にはどのような動機があるのか、なぜそのような行動が起こり得るのかについて考察したい。

その際、論点となるのは、冒頭で示した例のように、利他行動の動機として愛や共感が不可欠であるのかどうか、またそのような共感の性質をもつ遺伝的要素をどのように人間が獲得したのかについて、進化生物学的な視点で検討を進めたい。さらに、遺伝的性質の限界を補って、倫理規範や宗教教理が影響する可能性についても考えることとする。

殊に、価値観の多様化・グローバル化が進んだ現代社会においては、従来の「徳」²や「信仰」に基づく価値観とそれを啓蒙する教育および共同体が崩壊する³中で、他者との関係性や他者存在の意義が変化しつつあり、自ずと自分自身の存在の拠り所を見失っているように思われる。そのため、新たな知見から人間の利他性について再考する必要があると考えられる。

しかし、自然科学の一面から利他行動を捉えるということについての本論文の意義は、献身した人々のふるまいを「生物進化」というストーリーの中に全くはめ込んでしまおうということではない。むしろ彼らと同じ人間として共通する素質が、われわれ多くの人の中にも潜在する可能性を発見することにより、特定の宗教の内部や、宗教者と非宗教者の違いを超えて、人間の利他性についてより多角的に考察することを意図している。

2. 利他行動をめぐる諸概念の定義

「利他主義」は *altruism* の訳語で、フランス革命後の社会混乱の收拾を図

² A・マッキンタイア著、篠崎榮訳『美徳なき時代』、みすず書房、1993、pp. 277-321。

³ R・セネット、北山克彦訳『公共性の喪失』、晶文社、1991、pp. 28-44。

るため、社会学者 A. コントが造った語であり、当時蔓延していた利己主義的風潮への対抗原理として掲げられた⁴。日本においては明治期に「愛他主義」と訳されたが、現在の「利他」の意味については、広辞苑によれば、①自分を犠牲にして他人に利益を与えること。他人の幸福を願うこと。②(阿弥陀仏が)人々に功德・利益を施して済度すること、となっており、もともとは大乘仏教の語である「利他」と相まって、神仏による救済という意味も含まれたようである⁵。このように、利他という語には様々な理解があり、その動機として、他者の幸福を願う行為のみを利他行動とみなす見解があるが、本論文では、「自分を犠牲にして他人に利益を与える行動」すべてを利他行動と定義することにする。

したがって、「他者の幸福を願う」という性質は、利他行動の必要条件ではなく、それ以外の動機による行動も利他行動に含まれる。たとえば、利他行動の中には、相手の福利を図る以上に、自分自身への「見返りを期待する」という動機のものがある。「見返り」の種類には、のちにその相手から同質の行為を受けたり、直接・間接に財物を得たりするだけでなく、社会的賞賛、自己実現なども含まれる。また、それらの「社会的利益」を「生物的利益」に当てはめて見るならば、「見返り」は、自身の生存のために有利な性質を獲得することにつながると理解できる。生物としての利益は、個体の生存だけでなく、種の存続を目的とするため、個体の様々な行動やそれによる報酬は、遺伝子を遺せるかどうかにかきかえられてくるのである。すなわち、生物学的な意味では、個体が犠牲になって遺伝子の存続に貢献するという場合があり、これも一種の見返りには違いないが、本論文では、「見返り」はあくまで行為者の利益となることのみ限定する。つまり、生物にも、ここでいう意味での見返りを期待しない利他行動はあり得ることになる。

しかし、人間には、全く見返りを期待しない利他行動がみられることがある。修道者や出家者のように、自己の人生をなげうって他者に奉仕する行動や、ときには自身が死に至るような自己犠牲的な行動もあり、これは、遺伝子の存続

⁴ A・コント著、霧生和夫訳「実証精神論」(『世界の名著 46 コント、スペンサー』所収)、中央公論社、1980、pp. 205-207。

⁵ 廣松渉ほか編『岩波哲学・思想事典』(以下、『事典』と略称)、岩波書店、1998、p. 1680。

のための行為として理解される生物的な利他行動としては説明し難いように思われる。すなわち、淘汰⁶の原則によれば、利他的な性質をもつ個体は、利他行動を行うことによって利己的な性質をもつ個体より余分なリスクを負うため、そのリスクを十分に上まわる程の利益が集団にもたらされない限り淘汰されてしまうはずである。

そこで、本論では、人間における利他行動の動機として、他者への「共感」という性質に着目した。一般にいう「共感」とは、共に感じる、共に苦しむ、あるいは仲間意識を持つ、といった意味をもち、とくに生存において他者に依存せざるをえない人間社会において、親近感や交友を生み出すための基本的な情緒であると考えられている⁷。生物学においては、共感とは、他者の体験を自分自身の体験に置き換えて認識することであり、そのためには、他個体の行動に対する認知能力や自己意識など、高度な知覚を必要とする⁸。

「共感」を表す同義語に、日本語では、同情、憐憫、などがあり、英語では *sympathy*、*empathy*、*compassion* などがあるが、それらはいつも明確に対応しているとは限らない。しかし主要な解釈としては、*sympathy* がもっとも広く他者の気持ちを感じ取る意味で使われ、*empathy* は他者への「感情移入」で認知的要素が強い。一方、*compassion* は他者への思い遣りや、苦しみなどの感情を共有するという意味で用いられる⁹。本論では、「共感」は *compassion* の語義に近い、感情の共有の意味で用いる。

このように、利他行動とそれらをめぐる諸概念の整理をしてみると、利他行動には、行為の見返りを期待するものとそうでないもの、また、見返りを期待しないもののうち、共感に基づくものとそうでないもの、に大別することができる（図1）。次章では、実際の生物の利他行動がこれらのどこに位置するかを検討しつつ、「見返りを期待しない利他行動」がみられる人間の特性について分析する。

⁶ C・ダーウィン著、八杉龍一訳『種の起源（上）』、岩波書店、1990、pp. 111-174。

⁷ 『事典』、p. 338。

⁸ 長谷川真理子『ヒト、この不思議な生き物はどこから来たのか』、ウェッジ、2002、pp. 52-56。

⁹ *Merriam-Webster's Dictionary of Synonyms*, 1984, pp. 809-810.

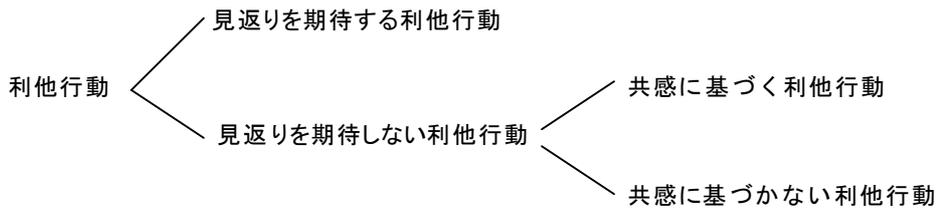


図1. 利他行動の分類

3. 利他行動についての進化的見解

3.1 血縁選択

親が子を優先的に扶養・保護することは、たとえ身を挺して溺れる我が子の救助にあたって命を落としたとしても、それは子孫の存続に貢献する行為であり、生物的に見て遺伝子存続の目的に適っている。では、兄弟・姉妹やそれ以下の近縁者間の利他行動はどうであろうか。近縁者に対する扶助行動や犠牲行動は、「血縁選択」(kin selection) という理論で説明が可能である¹⁰。献身的かつ自己犠牲的な昆虫の例としてよく知られる、ミツバチの「働きバチ」が自分の子を産まずに女王バチの子(働きバチにとっては妹たち)を育てる行動は、自個体の子孫に貢献しないようにみえる。しかし、血縁の濃度を算出¹¹すると、両親の遺伝子型が対称でないとき(雄半数生物および二倍体生物の半性遺伝子の場合)、姉妹間の血縁の度合い(0.75)は、母娘間のそれ(0.5)よりも50%も濃いため、その行動が進化したことが説明できる¹²。

また、外敵に対する攻撃では、同じくミツバチの「働きバチ」やシロアリの「兵アリ」は、自分の死と引き替えに、毒性のある刺針を外敵の体内に置いたり、攻撃用の粘性の分泌物を放出させたりする。しかしこのシステムによって、外敵への毒の効果を増し、敵の皮膚に置き去りにされた針の基部から出る匂いの物質が、巣の他の仲間たちを刺激して更なる攻撃を仕向ける効果があ

¹⁰ Maynard Smith, J., "Group Selection and Kin Selection." *Nature* 201, 1064, pp. 1145-1147.

¹¹ Hamilton, W. D., "The genetical evolution of social behavior I." *J. Theor. Biol.* 7, 1964, pp. 1-6.

¹² 青木健一『利他行動の生物学』、海鳴社、1983、pp. 24-25。

り、集団全体にもたらす利益からみれば、一匹の死のリスクは小さい。

これらの行動は、個体レベルでは犠牲を払っているため、利他行動の一種に含まれるが、集団レベルでは集団の存続に貢献する行動であり、共通遺伝子を残すための適応方策であると考えることができる。すなわち、種の存続という生物の性質においては、血縁者への扶助・犠牲行動は、適応方策の一つなのである。

人間においては、古くから慣例として行われてきた「養子取り」が、血縁選択の事例の一つと考えられる。グローバル化した現代では、国家や文化をまたがった養子取りも行われるが、旧来は狭い地域内で行われていた。オセアニア諸島における調査では、養子の大半は養父母と0.125以上（甥や姪、いとこおよびその子など）の血縁関係があるとのことである¹³。したがって、近縁者への扶助は集団の存続に貢献する行動ではあるが、当個体にとっては「見返りを期待しない利他行動」の一種である。

また、アリやハチのような社会性昆虫には個体識別能力がなく、遺伝的にプログラムされた行動であるにすぎないが、人間においては、血縁への愛着や同胞意識の感情が血縁選択としての利他行動の動機となることも考えられる。

3.2 互恵的利他行動

非血縁者に対する利他行動についての代表的な説明としては、「互恵的利他行動」(reciprocal altruism)¹⁴という理論がある。これは、自分がしたのと同様かそれ以上の見返りをのちに得ることを見越して行う援助行動である。費やしたリスクを確実に回収するために、特定の個体間の社会関係が長期にわたって続く、半ば閉鎖的な集団で生活していること、また互いに個体識別し過去にどんな行動のやりとりがあったかを記憶できるような何らかの認知能力を持っていること、そして、行為者が被る損失よりも行為の受け手が受ける利益の方が大きいこと、という一定の条件が必要になる¹⁵。

¹³ Silk, J. B., "Adoption and Kinship in Oceania." *Amer. Anthropol.* 82, 1980, pp. 799-820.

¹⁴ Trivers, R. L., "The Evolution of Reciprocal Altruism." *Quart. Rev. Biol.* 46, 1971, pp. 35-57.

¹⁵ 長谷川寿一・長谷川真理子『進化と人間行動』、東京大学出版会、2000、p. 164。

たとえば、チスイコウモリが飢えた他個体に血を分け与える行動¹⁶や、チンパンジーの集団内の派閥争いの際のリーダーへの支援行動¹⁷などが観察され、これら哺乳類以外にも、自分の体についてのゴミや寄生虫をエビやソウジウオなどに掃除してもらい共生関係を保つサカナの例がある。

人間社会にみられる利他行動の多くも、この互惠的利他行動として説明できる。人間はより高次の認識能力や自己意識などをもち、社会構造や相互関係が複雑であるが、人間行動も他の生物にもれず、生存と生殖のための自然界の巧妙なシステムの上に成り立っている。それは、奉仕的な要素の強いボランティア活動でさえ、互惠的である場合が少なからず考えられる。医療福祉のボランティアに関するある調査¹⁸によると、彼らの動機の主なものに、社会貢献、有用感の充足、喪失体験の整理、知識技能の習得などがあると報告されている。これも見方によれば、奉仕活動により被援助者との関わりを通じて、広義の自己実現を図ろうとしているという側面があり、被援助者の苦痛の軽減などといった目的が第一義とはなっていないことから、「相手の利益」以上になんらかの見返りを期待している結果であるといえる。殊に人間においては、物質的利益や社会的利益の他に、心理的要素――自己顕示や自己賛美、優越感や義務感のため、喪失感・空虚感・無用感の埋め合わせ、自己憐憫の投影、罪滅ぼし、悪意や怠惰の言い訳のため、あるいは功德を積んで「来世」の恵みを期待するなど――も一種の「見返り」と考えられることがある¹⁹。

3.3 自己犠牲行動

血縁選択でも互惠的利他行動でも説明できない行動に、自分の命が危険に晒されるにもかかわらず他者を救援しようとする「自己犠牲行動」があるが、当然これはリスクが高く「見返り」は期待できない。人間の自己犠牲行動は、ミ

¹⁶ Wilkinson, G. S., "Reciprocal Food Sharing in the Vampire Bat." *Nature* 308, 1984, pp. 181-184.

¹⁷ F・ドゥ・ヴァール, 著、西田利貞訳『政治をするサル』、平凡社、1994、pp. 276-281。

¹⁸ 安立清史『病院ボランティア やさしさのこころとかたち』、中央法規、2001、p. 150。

¹⁹ ルソー, J. 著・戸部松実訳「エミール」(『世界の名著 36 ルソー』所収)、中央公論社、1978、pp. 474-483。

ツバチやシロアリのそれとは、相手が近縁者でないという点で異なる²⁰。たとえば、ユダヤ人迫害下のアウシュビッツ収容所で「身代わりの死」を遂げたコルベ神父²¹や、ハワイでハンセン病患者のケアに一生を捧げ自らもハンセン病に臥したダミアン神父などは有名であるが、一般の人々にも自己犠牲行動を行った人が多くいることもよく伝えられている。

第二次世界大戦中のナチス＝ドイツ政権下で、ユダヤ人を匿った人々の報告²²によると、インタビューに応じた10人のオランダ人の多くは、自然な気持ちで自発的に行動を起こしたと述べており、そのうちのある一人は、同胞が銃殺されたことで危機感を感じていたため、いち早く救助活動を始めたという。また別の一人は、妻子がありながら家族の生活が危険にさらされるにもかかわらず、ユダヤ人を匿ったと報告されている。

このような自己犠牲行動が起こる要因として、他者の苦しみへの強い共感をもつ可能性が考えられる。その他、線路に落ちた人を救おうとしたり、襲われている人を勝ち目がないことを承知しながら救援したりする人も、瞬時に湧き起こる共感による行動であるという報告がある²³。

3.4 弱者支援行動

自己犠牲行動のように直接命の危険と結びつく訳ではないが、弱者支援行動も大きなリスクを払う利他行動である。むしろ、援助を継続するためには、突発的行動よりも堅固な動機が維持されなければならない、また間接的にその集団に広範で長期に渡ってリスクを負う可能性さえある。

人間の弱者支援行動としては、心身障害者やホームレスなど社会的・経済的に困窮した人、臨死の状態にある人などへの援助や奉仕など、多くの例がある。しかし、生物進化の側面から見れば、遺伝的疾患や病弱な傾向をもつ者、社会適応能力の不十分な者、死に際してもはや生産性の期待できない者に、物的人

²⁰ 青木：前掲書、pp. 64-65。

²¹ M・ヴィノフスカ著、岳野慶作訳『アウシュビッツの聖者コルベ神父』、聖母の騎士社、1988、pp. 267-287。

²² Monroe, K. R., *The Heart of Altruism*. Princeton, 1996, p. 92.

²³ Ibid., p. 17.

的な資源を投じて援助することは、集団にとって社会的・経済的に負担を負い、集団の適応力を下げることになってしまう。それゆえ、進化生物学的にはこの類の利他行動は起こりにくいはずであるが、人間社会では、福祉事業のように社会システムとして広く受け入れられている。

援助者の動機としては、他者の苦しみへの強い共感があることが考えられるが、互恵的利他行動の節でも述べたように、社会的あるいは心理的「見返り」が、自覚されずとも意図されている場合も少なくない。大戦後、日本の残留孤児を育てた中国人の養父母たちの動機²⁴は、調査に協力した養父母14名のうち9名が、「このまま見捨てればこの子は死んでしまう、かわいそうでどうしようもなかった」といったものであった。敵国の日本人の子を引き取ることは貧しい家計を圧迫するだけでなく地域の体面的にも不利であり、近隣や親族・兄弟だけでなく子ども本人にも日本人である事実を隠し通さねばならなかったにもかかわらず、引き取ることを決断した。これらの中国人は日本人に迫害を受けながらも、敗戦で逃げ惑う日本人の子どもへの境遇に同情していたようである。しかし、その他の動機として、自分に子どもができなかったからという理由や、子どもを引き取ったら（その功德で）男の子を生み授かることができると考える社会通説もあったようだ。

それでも、弱者支援の典型的な人物としてよく知られる、死にゆく人や孤児の世話をしたマザー・テレサ²⁵や貧しい人々と共に生きたアシジのフランシスコ²⁶などのように、他者の苦しみへの強い共感による献身的な活動が伝えられている。また、身分や社会的地位にかかわらず、支援の対象とされるような人々の中でさえ、共感に基づく弱者支援行動の事例は、あらゆる層の人々の中に多くある²⁷。

弱者支援行動は、まれに動物においても観察される。イルカやクジラは、鉈や網にかかった仲間を救おうと紐を食いちぎったり、漁船を囲んで体当たりし

²⁴ 浅野慎一・トウガン『異国の父母ー中国残留孤児を育てた養父母の群像』、岩波書店、2006、pp. 2-135。

²⁵ N・チャウラ著、三代川律子訳『マザー・テレサ 愛の軌跡』、日本教文社、2001、pp. 43-45。

²⁶ 川下勝『太陽の歌 アシジのフランシスコ』、聖母の騎士社、1991、pp. 109-154。

²⁷ Brehony, K.A., *Ordinary Grace*. Riverhead Books, 1999, pp. 217-224.

たりする救助行動がみられ、シャチは、方向感覚を失った仲間を見捨てられず、付き添ううちに群れ全体が浜に打ち上げられてしまうようなことも報告されている。チンパンジーやゴリラなど類人猿は、障害があったり傷ついたりした仲間に対して、群れの順位を飛び越えて早く餌を与えたり、攻撃を控えるといった「特別扱い」をする。ゾウは、群れから遅れた仲間寄り添ったり、瀕死で倒れそうな仲間を鼻や牙で支えたりする行動、さらに仲間が死んだときには土や枝をかけて「埋葬」する行動もある²⁸。非血縁者に対しては、動物園のゴリラが檻の柵から落ちた人間の子どもを救出するという出来事もあり²⁹、共感に基づくと思われるような利他行動の事例がまれにみられる。しかし、動物にみられる弱者支援行動のほとんどは、家族や群れといった比較的血縁の濃い「仲間」に対する行動であり、人間の修道者たちのように血縁に関係なく広く他者に奉仕しようとするような例は、他の生物では極めて少ない。

4. 共感と利他行動の関係

なぜ人間は、多大な危険を負ったり、圧倒的な不利益を被ったりする可能性があるにもかかわらず、自己犠牲行動や弱者支援行動を行うのだろうか。筆者は、これらの事例から、他者の苦しみに共感することが、これら人間の利他行動の大きな要因になるのではないかと考えた。

すでに多くの哲学者が、概念としての「共感」に注目してきた。ヒューム³⁰は、共感とは同情や憐れみの意味とは別に、他者の幸・不幸を自分自身のものと同じように考慮するものと捉え、またその共感とは、道徳的是認の「対象」ではなく、その「源泉」を意味するものとしている。さらにスミス³¹は、他者の情念に対する直接的な共感から生じる「適宜性」が道徳的行為へと指向させる

²⁸ F・ドゥヴァール著、西田利貞訳『利己的なサル、他人を思いやるサル』、草思社、1998、pp. 74-103。

²⁹ Hirshberg, C., "Primal Compassion." *Life*, November, 1996, pp. 78-82.

³⁰ D・ヒューム著、渡部俊明訳『道徳原理の研究』、哲書房、1993、pp. 1-9。

³¹ A・スミス著、水田洋訳『道徳感情論』、筑摩書房、1973、pp. 5-34。

と考えた。同時代のカント³²も、他者への共感的感情は、人間本性のうちに植え込まれているものとし、これを社会的手段として用いることは義務であると主張した。ベンサム、ミルの功利主義³³や、ネーゲルの客観化³⁴なども、自己と他者の重みを等しく見るという点で、利他性の一つの視点であると考えられる。しかし、様々な見解の内には、利他的行動が生得的な性質であるとする見解がある一方、従うべき規範として与えられるものとの見解があり、共通理解には至っていない。

では、共感をもつのは人間だけなのだろうか。「共感」に基づいた動物行動に関する研究は、動物生態学においても注目されてきている。動物学者のドゥ・ヴァールは、共感と利他行動の関係について、「感情移入」(empathy)に「愛着」(attachment)および「他者の利益への配慮」が加わった「共感」(sympathy)の能力によって、血縁者や仲間に対する援助行動が起こるとの見解を示している³⁵。前章の弱者支援行動であげた海獣、ゾウ、霊長類の例も、共感によって起こるのではないかと主張している。

人間においても、血縁の度合いが強いほど共感をもちやすい部分もあるが、上記の修道者たちの例をはじめとして、そうでない場合も多くみられる。したがって、共感に基づく利他行動は、動物に全くないとはいえないが、それは人間と比較すれば極めてまれなことであり、やはり共感に基づく利他行動が人間に著名な性質であることは明らかだと考えられる。

5. 「共感」形成における遺伝と文化の影響の可能性

人間における強い共感の感情はどのように形成され、また、どのように人間の利他行動を動機付けるものとなったのだろうか。ここで共感の成立について一つの仮説を提起したい。

³² I・カント著、野田又夫訳「人倫の形而上学の基礎付け」(『世界の名著 39 カント』所収)、中央公論社、1979、pp. 288-289。

³³ J・S・ミル著、伊原吉之助訳「功利主義論」(『世界の名著 49 ベンサム、J.S.ミル』所収)、中央公論社、1979、pp. 461-528。

³⁴ Nagel, T., *The Possibility of Altruism*. Princeton, 1970, pp. 90-98.

³⁵ ドゥヴァール前掲書(1998)、pp. 141-154。

高度な学習能力を獲得した動物は、自分の経験によって「生きるための知恵」を獲得し、それを蓄積して成長する。しかし、個体が経験できることは限られているため、もし他個体の経験も自分の経験と同様に認識されれば、より多くの知恵が蓄積できるはずである。「共感」とは、他者の体験を自分自身の体験に置き換えて認識することであり、とくに苦痛への共感、そのことによって危険の回避、失敗からの学習など、生存に有利な情報を効果的に蓄積することに貢献する可能性が考えられる。これは、動物にも見られる共感行動に近いかもしれない。しかし、言語をもたない動物は、集団の他個体や子孫に効果的に経験を伝えることができないため、他個体の危険に遭遇する以外には、学習の機会はごく限られている。

一方、人間においては、言語の発達により膨大な情報の継承が可能になり、より多くの経験を伝えることができるようになった。伝えられた内容に強く共感し、自分が経験した場合と同様の効果が与えられるとすれば、継承される内容がより確実に生きる知恵として蓄積されるはずであり、そのような性質が生存に有利に働いたため、共感の性質が進化したという可能性が考えられる。生きる知恵の蓄積は文化であり、生きる知恵を継承する能力が増せば、共感の性質がより効果的に活かされるので相乗作用が働いたのではないだろうか。遺伝的性質は、遺伝子をもっていたとしても発現しなければ性質として表現されず、文化や教育が、その発現を促す要素になり得ることも考えられる。そして、共感という遺伝的性質と生きる知恵の継承としての文化が「共進化」³⁶したと考えられる。したがって、生物の中で唯一文化を持った人間が、特に強い共感の性質を持つに至ったと考えることが可能である。

この仮説が正しければ、人間は生まれつき共感の性質をもつということが無理なく説明でき、利他行動の多くが共感に基づくものであることも納得できる。そこで、実際に共感の性質が利他行動を促すように機能していることを確認するため、筆者は、奉仕活動に携わる人々が、その動機として被援助者に対する

³⁶ E・O・ウィルソン著、山下篤子訳『知の挑戦』、角川書店、2002、pp.156-159。「共進化」とは、生物種の性質が互いに影響し合って進化することを指すが、ウィルソンは、人間の祖先が文化を獲得した際に、遺伝的進化と文化の発展が互いに影響し合いながら進行したことを、遺伝子と文化の共進化 (gene-culture coevolution) という言葉で表現している。

共感をもっているかどうか、インタビュー調査を試みた。

6. 奉仕活動の動機の聞き取り調査

筆者が本論のようなテーマに関心をもったことの一つには、筆者自身のボランティアの経験によるものがあつた。筆者は、2002年10月～2005年3月まで東京都台東区の山谷・すみだリバーサイド支援機構「きぼうのいえ」（ホームレスのためのホスピス）にて、2005年10月～2006年9月現在まで東京都清瀬市の信愛病院緩和ケア病棟にて、延べ三年半、平均して約週2回のボランティア活動を行った。活動内容は、施設および病棟ではケアや生活支援を中心としたものであり、単発的にはホームレスへの医療・支援活動などにも携わつた。筆者自身の当初の活動の動機は、死をみつめることによって生の意味（または無意味）を考えたいというものであつたが、活動を通して援助の困難や福祉の課題を学ぶとともに、奉仕の意義、人間の性質、信仰などに関心が向くようになった。

それらの活動の折に、ともに働いた人々あるいは出会つた人々は、少なくとも積極的に他者の困難や苦しみに関わろうとしている人が多いと思われたが、本当にそうであるのか、またそうであるならばなぜそのような動機をもつたのか、といった問いが起つた。そこで、他者への共感が奉仕活動の中心的動機として存在するのだろうか、より客観的に裏付けるために、独自にインタビューを行った。

対象者を選考する際のひとつの基準としては、継続的に奉仕活動に携わる者で、宗教をもつかどうかは問わないが、世襲の宗教家は除外した。また、ここでの「奉仕活動」の枠組みは、直接あるいは間接に家族・親族以外の他者を援助するものであり、基本的には無償での活動を対象とした。ただし、現在は有償の支援活動であっても、過去に無償のボランティア活動を行ったことがあつたり、その経験が現在の職に影響していると思われる場合は、対象者に含めた。

インタビューは半構造化され、活動の動機が他者への共感によるものかどうかという点が主旨であるが、活動の内容や育つた環境など周辺的な事柄も同時

に質問した。インタビューは2005年5月～2006年7月の間に、以下の13名に対して行われ、回答は筆者が筆記によって記録した。

職業（宗派／教派）	年代	性別	主な奉仕活動の種別・内容
・A カトリック・シスター	50代	女	ホームレス支援、ホスピス、部落差別
・B カトリック修道士	40代	男	ホームレス支援
・C 高野山真言宗僧侶	40代	男	説法、悩み相談
・D タイ仏教僧侶	40代	男	農業推進、村民教育
・E タイ仏教僧侶	60代	男	児童人身売買防止、経済援助
・F カトリック信者	30代	女	DV母子シェルター、外国人労働者援助、知的障害者ケア、インド児童里親契約、
・G 元小学校教諭	60代	女	ホスピス、高齢者支援
・H 郵便局員	40代	男	清掃
・I 大学生	20代	男	ホスピス
・J 大学教員	20代	女	ホスピス、ホームレス支援
・K NGO事務局員	40代	女	海外支援
・L 大学院生	20代	女	ホスピス
・M 大学生	20代	男	戦争被害者支援

他者への共感が奉仕活動の動機に直接結びついているかどうかについて、それが当てはまると思われるインタビューの結果を以下に列記すると、「自殺した兄に何もしてあげられなかったけれど、同じように苦しんでいる人がいたならば、私が少しでも力になりたい」(A)、「ホームレスの人たちに対し、どうしてそのような状態になってしまったのだろうかという疑問が頭にあったが、関わり合ううちに私たちと同じ人間であることに共感した」(B)、「私たちは皆、そのような苦しみの中にいる存在で、自分と同じように他の人も苦しい」(C)、「NGOで援助に携わる人々が悩みや混乱に苛まれていたことに対して、おおらかに安らぎをもって村人に接するお坊さんの姿に心を動かされた」(D)、「子どもたちの悲しむ顔や苦しむ姿を目にして、そのことが頭から離れずに自分が悲しい気持ちで死ぬのは損だ」(E)、「幼い頃にテレビで見た、貧しいア

フリカの子どもの映像が忘れられない」(F)、「すべての人が幸せにならなければ、自分は幸せになれない」(G)、「生きることは苦しいですが、お互いそういうもの同士助け合って成長していけたら」(H)、「したいことができなくて困っている人に、なにか手助けをしたい」(I)、「彼らの満たされなかった人間らしい欲求は、私たちすべての人にもある」(J)、「路上で生活している人々なども目の当たりにして胸が痛んだのに、今自分はいったい何をやっているんだろう」(K)、「祖父が亡くなった時にできなかったことを、他の人にしてあげたい」(L)、「従軍慰安婦の方の話を聞いて、胸が痛んだ。戦争の痛みが終わっていないことを伝えていかなければ」(M)、などといったコメントが伺え、すべての対象者に共通して、奉仕活動のきっかけや継続の動機として、他者の苦しみへの共感をもっていた。

対象者の状況については、対象者A～Eは、出家者または修道者あるいはそれに準ずる人で、配偶者をもたずに、奉仕を日常的活動の中心としているため、社会的な自己実現を目的としていないことは明らかである。対象者F～Mは、出家者でも修道者でもないが、学生でありながらボランティアをしたり、仕事としての活動の場合でも、これまでの良い待遇の所から転職し、あえて弱者に関わる仕事を選んでいるといった点で、ある程度の自己犠牲を払っている。

また、自分自身の共感と結び付けて、宗教的教理および開祖または聖者の名やその生き方について言及した人は、対象者13人中I・L以外の11人であり、そのうち宗教者でない者は6人であった。成育期の宗教的背景の有無については、対象者B・M以外のすべては、保護者など近親者に宗教家や信者が全くいない環境で育ち、必然的に宗教に触れる機会が少なかった人であり、対象者B・Mは、保護者などに宗教家や信者がいて、宗教教育に触れる機会があった人である。

以上のインタビューの結果から示されることは、第一に、成育期までに宗教的背景がなくとも、人生を奉仕に捧げる者もおり、そこには他者の苦しみへの強い共感が動機の一部となっているということ、宗教的背景をもつ者は、宗教的教理が意識される以前に他者への強い共感に基づいて喚起される場合が多いことであった。

第二に、宗教的教理が奉仕への理解や心得の助けとともに、自己の経験を他

者への共感と結び付け、利他行為を発動・継続させる動機付けとして大きな役割を果たしていたことが伺えた。さらにこのことは、利他行為の勧めを表すような宗教の教理において、宗教間で共通した点があるとみることができた。

7. 考 察

第3章で検討した利他行動の事例および第4・5章の共感についての考察と仮説、そして第6章のインタビューの結果を総合すると、「見返りを期待しない利他行動」の動機の一つに、他者への苦しみに対する強い共感がある可能性が考えられた。そして、このような自己犠牲を伴いながらも継続的に他者に貢献しようとするような強い共感に基づいた利他行動は、人間にのみ起こる行動である。

従来の利他行動の説明では、なぜ人間だけが強い共感をもつことができるようになったかという経緯については明確な理解がなされていなかったが、第5章で、他者の経験を自分のものとして理解するという高度な認識力と言語をはじめとする文化による効果的な伝達手段がそれを可能にしたという仮説が、第6章のインタビュー調査の結果とも合致する。したがって、そのような他者への共感をもつ性質が遺伝的性質として獲得され、生きる知恵の伝承に貢献したという、遺伝的要素と文化的要素の「共進化」によって、人間はさらに強い共感をもつ性質を獲得したという説明が可能になる。そのため、自己犠牲行動や弱者支援行動をとる個体がしばしば現れ、それが好ましい行為として社会に受け入れられたことが考えられる。

また、インタビューの分析により、他者の苦しみに対する生得的な共感の性質が、社会規範や宗教教育によって啓発・維持され、継続的な奉仕活動を可能にしたもとと考えられる。つまり、見返りを期待しない利他行動は、強い共感をもつ遺伝的性質と共感を促す文化とが共に進化・発展する中で、発現されるようになったという過程と整合する。すると、共感を好ましい事柄とみなす理解が、文化の中に定着することも理解できる。

したがって、見返りを期待しない利他行動は、「利己的」な生物的性質³⁷と

³⁷ R・ドーキンス著、日高敏隆他訳『利己的な遺伝子』、紀伊國屋書店、1991、pp. 109-140。

両立し得ないものではなく、利他行動を促すような文化も、元来人間が獲得してきた性質をより活性化するものとして妥当な内容であると考えられる。つまり、利他行動は、強い共感をもつ遺伝的性質と人間特有の文化によって裏付けられる事柄であると言ってもいいだろう。したがって、それは特定の宗教の教理の中だけにとどまらず、多くの宗教の共通項にもなり得る可能性がある。殊に、多元化社会における他者との関係として、文化や宗教間の違いによらない共感の性質があるのであれば、その性質をよりどころにして、宗教や文化の対立を超えた調和を追求する道があるのではないだろうか。そのためには、共感を培う文化やその基礎概念を形成する倫理、宗教の多様性の中の一致点としての意義に注目すべきであると考えられる。人間が強い共感の性質をもつことは、他の動物にみられない顕著な特徴であり、それによって利他行為がなされることは、人間に備わった美点と見なすことができるかもしれない。

しかし、もし共感の発現が遺伝的性質に由来するのであれば、共感が欠落するような遺伝的欠陥をもつ場合もしくは遺伝的には正常であってもその性質が正常に発現しない場合も起こり得ることになる。実際、他者に思いやりのない残忍なふるまいをする人や、人間としての他者に対して文字通り応答できない人がいる。そのような場合でも、倫理規範の習得や宗教教育を受ける機会が与えられれば、生得的な性質の有無にかかわらず利他行動を行うことができるかもしれない。今回のインタビューにおいては、共感も宗教的背景もともにある人、共感があるが宗教的背景をもたない人、の二通りであったが、やはり、共感がなく宗教的背景だけある場合にも利他行動が起こり得ることは考えられる。そうであるとすれば、人間は、人間以外の動物とは異なり、遺伝的性質のみに支配されない生き方を獲得したことになる。このことから、宗教や倫理は個々の遺伝的性質の限界を超えて、より普遍的に人間の行動を律することができるのではないかと考えられる。

8. 結 論

人間の利他行動は、基本的には他の生物種と同様に、血縁者への扶助、互恵的な協力行動などとして起こってくるものであるが、ときに見られる自己犠牲を伴ったり弱者に奉仕をしたりする「見返りを期待しない利他行動」は人間に

特徴的である。そのような行動は、宗教的背景を持つ持たないにかかわらず、過去の事例においても現代の身近な社会活動においても見ることができる。そしてそれらの動機が、他者の苦しみへの共感に基づいている可能性があることが示唆された。

また、共感が進化した要因としては、文化を獲得したことによって生きる知恵が継承されるようになったため、継承の内容が自分の体験と同様に活かされるようになったことによると考えられることを指摘した。その結果、遺伝的性質としての共感と生きる知恵の継承としての文化との共進化によって、より強い共感をもつ性質が人間に獲得されたことが説明できる。このことにより、「見返りを期待しない利他行動」は、人間にとって特別な行動ではなく、誰にも起こり得るものであると考えられる。さらに、たとえ共感の遺伝的性質が欠落していても、倫理規範や宗教教理に従うことによって、利他行動を行うことが可能であることから、倫理規範および宗教教理の根幹であるかのような利他行動の勧めは、人間のもつ遺伝的性質と整合性をもち、なおかつ遺伝的性質を超えて、より普遍的に人間行動を律する原理となる可能性を示唆するものである。

謝 辞

本論文の執筆にあたり、インタビューに快く協力してくださった方々を初め、多くの方のご理解・ご支援にいただいた。殊に、拙論の校閲を賜った土田友章教授、日々の研究にきめ細かなご指導頂いた戸川達男教授に、心より感謝いたします。

キーワード：

共感、利他行動、動機、宗教、共進化

KEYWORDS：

compassion, altruistic behavior, motivation, religion, coevolution